

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520290

研究課題名(和文)メタファーとメディアの相互性に関する研究 近現代ドイツ圏の場合

研究課題名(英文)Research on the relationship of a metaphor and media

研究代表者

鈴木 純一 (SUZUKI, Junichi)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：30216395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近現代の文学・批評・思想・美学等のテキスト・作品におけるメタファーという表現形態を、メディア(媒介)原理との関連で明らかにするとともに、芸術・文化・社会に関する領域で近年盛んに行われているメディア分析ならびにメディア論的テキスト分析の方法論が、その根底においてメタファー的な機能に支えられていることを検討した。素材に関しては、近現代のドイツ圏を中心にしつつも、宗教テキストや音楽記述、アート作品など幅広く分析し、その結果、形態は多様ではあるが、仮説として導入したメタファーとメディアの原理的相互依存関係(システム論的な接続と切断の二重機能)を多くのテキスト・作品に認めることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify relation between the metaphor in texts, such as modern literature, thought, etc., and media. Moreover, it also examined that the foundation of the methodology of the media analysis about art, culture, and society was in a metaphor function. The material in the modern German bloc became a main candidate for analysis. However, about the characteristic material, it took up also in the other domain. As a result of research, although the style was various, it was able to observe the correlation of a metaphor and media in many texts and works. This is in agreement with the double function of the metaphor which is the hypothesis built up by this research. Furthermore, it is connected with the double function of "connection and separation" in system theoretical methodology.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学・独文学

キーワード：メタファー メディア テキスト論 システム論

1. 研究開始当初の背景

本研究組織は、十数年の長きにわたり、ドイツ語圏を中心に、近現代の文学・批評・思想テキストにおけるメタファーという現象の意義の解明について取り組んできた。その過程は大きく3期にわかれていた。第1期ではメタファーの現代思想や文学批評における位置づけを、当時人文学においても影響力をもち始めた自然科学的な新しい理論の文脈を意識しつつ(特に認知理論との関連において)整理することを中心に、また第2期においては現代のテキスト・コミュニケーション学的視点(間テキスト性やエクリチュール論)を用いて、テキスト相互のメタフォリカルな影響関係を具体的に分析することを中心に、そして第3期においてはメタファーという現象が、そもそも西欧の思想的・文学的営為が内包するメタレベルの志向性を支える意味転換原理として機能しているのではないかという原初的な問い(ニーチェの「木の葉」への問いはその最も明快な表現であろうか)へ立ち返ることを中心に、研究を進めてきた。

本研究の主題は上記の一連の研究の継続的かつ発展的な性格を有する。すなわち、これまでの研究成果にもなつて生じてきた問題を整理するとともに、それらを一層深化させた形で再度対象化するのに最も相応しい課題として浮上してきたのが「メタファーとメディアの相互作用(依存性)」というテーマである。

2. 研究の目的

本研究は近現代の文学・批評・思想等のテキスト・コミュニケーションにおけるメタファー概念を、メディア原理ないしメディア原理との関連で明らかにするとともに、芸術・文化・社会に関する領域で近年盛んに行われているメディア分析あるいはメディア論的テキスト分析の方法論が、いかにメタファー的な原理と機能によって支えられているかについての検証と考察を目的とするものである。その際、対象とする具体的なテキストの選択領域と分析作業は、近現代のドイツ語圏における文学ないし批評テキストを中心としている。本組織の多くのメンバーがドイツ語テキストをもとに専門研究をおこなっていることもひとつの理由であるが、それ以上に、先ほど仮説として描いたメタファーとメディアの相互作用・依存現象が、原理的なテーマ化という意味(例えば「美学的な芸術批評」)においても、方法論的な物語技法(例えばカフカの「寓話」が支える物語の連続性)としても、そこに濃密にみられるのではないか、というわれわれの問題意識によるところが大きい。

われわれは、メタファーと見做しうるさま

ざまな表現形態ないし自律的運動現象の機能と原理を理論的かつ具体的に検証してきた。その結果、暫定的にあえて統括すれば「異なるものの一時的重ね合わせによる意味の二重化状態」ともいえるメタファーのメカニズムは、認知発見的(科学)、芸術創造的(美学)、言語認知的(哲学思想)、システム形成的(社会学)等、非常に広範な領域において原理的な役割を負託され、またその機能を対象に適応しつつ果たしているのではないかと予期するに至った。

「異なるものの一時的重ね合わせによる意味の二重化状態」メタファーのこの原理的特質は、その先に「異なるものの同一化(結合)あるいは差異化(切断)」という接続作業の選択を含意し、要請しているのではないか。そして「結合か、切断か」というこの選択的な続行可能性ないし強制は、実は、メディア原理が果たす仲介機能の核心なのではないかという仮説が成立する。テキストの文脈でいえば、複数の表現単位の「異質性と同質性」あるいは「差異化と同一化」の二重性を意味のレベルで同時に意識化させるメタファーは、機能的には、その先に「結合と切断」あるいは「融合と分離」という相反するメディア的運動を動機づけかつ要請する前提条件ともなっている。そして、このメディア的な選択的操作が、新たなメタファー的な意味の二重化を生成するという自己再生産的循環構造を、すなわち両者の相互依存的な構造を形作っているのではないかと考えられるだろう。しかし、意外なことに、従来メタファー研究、メディア研究いずれにおいても、両者が相関的な概念であることが論じられることはなかったように思われる。本研究はその意味でも理論的な独創性をもつと思われる。

3. 研究の方法

本研究は、メンバーによる文献読解・解釈・討論を中心とした研究会を中心に進められ、各研究会では、所定のテーマに関する担当者の研究報告と、これに基づく議論が行われた。研究会は北海道大学メディア・コミュニケーション研究院において各年度6回程度開かれた。また、必要に応じて認知心理学、情報学、メディア社会学等の専門家の協力を仰ぎ、メタファー認知、データ処理、メディア技術社会論などの関連領域の研究手法・視点も参考にした。

全体的な研究プログラムの方向性としては、まず「メタファー」と「メディア」の構造ならびに概念的な関連付けに関する暫定的な理論仮説を立て、両者の機能的な相関性ないし相互依存性を際立たせた。基本となる視点は、メタファーの「同一/非同一」差異(意味論)およびメディアの「同一化/非同一化」同一化(機能論)のメカニズムである。

続いて、具体的な素材として分析対象とするテキストの候補の選定と分析方法の検討をおこない、近現代ドイツ語圏を中心とする具体的テキスト、および必要に応じてそれ以外の領域のテキスト・美学的作品等の分析と「メタファー」理論および「メディア」理論、そして両者の関係理論へのフィードバックという作業を繰り返すことにより、理論の精緻化と分析の有効性の検証を行った。

4. 研究成果

(1)メタファーの機能的特徴

本研究において、メタファーのどのような特性が重視されていったかについてまず述べておく。従来、修辞学的定義における隠喩は、表現の意味の抽象化と対象の（偶然的）類似性という現象から、ある表現の本義と転義の二重性を極めて限定された技法として特徴づけるのが通例であった。しかし、我々の視点にとっては、人間の言語的な認知・認識さらには世界把握の原理としての性格を強調するレイコフ的メタファー観（＝経験を構成し、理解可能な体系的なものへ転換する機能）の有効性が次第に明らかになった。ただし、そのメタファーの起源を自然・身体・物理へと還元するレイコフの展開は、美学的なメタファー現象から大きく離れる立場として、全面的に与することは留保された。また、前項のなかで仮説として述べた、メタファーがおこなう意味の二重性の明示化（のちに「接続」へつながる）およびその背後で進行する意味の選択的削除（のちに「切断」へつながる）が原理的な機能として浮上した。この差異と同一性の二重化が、従来のメタファー観における本義と転義のずれと一次的なレベルで重なると考えられる。

(2)メディアの機能的特徴

我々がこの言葉で特に重視したのは「媒介作用」としての抽象的な（原理的な）意味である。しかし、いわゆる技術的なメディアやメディア組織なども、媒介原理を内包しているという意味において排除されているわけではない。また、その具体的な機能の中心にあるのはやはり「接続と切断」であった。その際、この機能を補強する構図として、後述する社会システム論における「形式（素材）とメディア」という関係性が有効であった。すなわち、素材としての形式を接続可能な形で意味として構成するというメディア原理であるが、これは、「接続と切断」としてのメディアを前面化するのに寄与した。いずれにせよ、具体的な分析成果においても明らかになったが、このメディアの一見相反する作用は基本的に二重化作用という意味でのメタファー機能に支えられており、したがってここにおいて、メタファーとメディアの相互的な関係性という本研究の中心仮説の理論

的妥当性が暫定的に得られる。

(3)システム理論との理論的な関連

現代社会学のシステム理論（特にルーマン）によると、すべての社会的観察・コミュニケーション・記述といったオペレーションの基礎にあるのは「システム/環境」差異化となる。この差異化（あるいは「同一/非同ー」・「自己言及/他者言及」の差異化）は、現代機能社会システムにおいては二元的コードおよびその下位基準のプログラムによって行われるが、その具体的な適応に関しては、意味の転換・接続・切断等の不確実性が介入する。この不確実性においてメタファー的なメカニズムが効力を発揮している（システム論的に言えば「複雑性の縮減」による理解・把握・接続可能なユニットへの転換）と考えられる。さらに、システム理論にみられるメタ理論的「差異化/同一化」差異化のメカニズムにもメタファーの二重化作用が重ねられ、またこの二重化は水平的なオブジェクトレベルの対象のみではなく、自らの観察レベルをも巻き込まれる自己言及的、二次観察のものである。この構造は、理論的には必然的にトートロジーとパラドクスを含む不整合を生む可能性があるが、しかし、逆にそれゆえに、「メタファーによるメディア機能」がリアリティを有しているとも考えられる。

(4)具体的な分析と理論との関連

テキスト・作品等の具体的な分析と理論とのフィードバックで得られた成果に関して、主たるものを挙げておく。まず 物語創作等の文学に関するものとして、例えば近現代ドイツ文学（トーマス・マン、ムジル、カフカ等）における世界把握の方法及び物語の組織化としてのメディア機能をメタファーに認めることができた。広く捉えれば、このことは現代の実験的文学、あるいは近代の西洋文学と意識的あるいは無意識的に対峙した夏目漱石や村上春樹のテキストからも取り出すことができた。次いで、批評テキストの領域では、アレゴリーの中から救済の徴を引き出そうとするベンヤミンの力技や、ポスト・モダンの思想に倣い自らを含む形で対象を解体するド・マンの批評方法などに、メタファーの持つ二重化・パラドクス・トートロジーと逆説的なリアリティ獲得、ついには批評のメディア的使命の実現の表現を見出すことができた。他方、宗教聖典とその解釈に関しては、比較的伝統的（レトリック的）なメタファー機能の背後に、継承されてきた解釈の積み重ねによる意味の重層化と不可視化（ユダヤ教のカバラ）あるいは解釈の規範化によるメタファーの固定化（キリスト教における解釈学）などが抽出されたが、これらはメタファーを飼い馴らすことがいかに難しいかの証しとも考えられる。その他にも、哲学・思想テキストにおいては、自己言及するメタファーへの批判的とも肯定的

ともつかぬデリダの脱構築テクスト、見るもの見られるものの構図が必然的に抱える主客関係からの脱却を試みるフッサール等の現象学のテクスト等にもメディア的機能によって支えられるメタファーの役割を認めることができるように思われる。しかし、何はともあれ 社会学的記述は、このテーマにとって、分析視点としても、また分析対象としても重要な意味があった。前述のようにルーマンの社会システム理論の構造は、一方において「メタファーとメディア」の二重化および両者間の往復（「振動」）作用の原理を説明していると同時に、その二重性を明示的に自らの構成原理としているからである。最後に、近現代の（メディア）アートについても触れておけば、例えば日本のアニメ作品における「遠さ・近さ」を媒介するメタファー的表現、近代から現代への西洋音楽の創作・批評・記述におけるメディア化とメタファーの機能の平行な変貌、絵画の構成要素としての視覚メディアとそのメタファー的な解釈技法などにも、先にあげた理論的な成果の特徴を見ることができた。

(5)まとめと課題

まとめとして以下の点を挙げておく。まず理論的には「メタファーとメディアの強い関連性・相互性」という基本的な発想が確認できたと考えられる。さらに、具体的な分析により、この関係性が形や言葉を変えながらジャンルを超えて様々な領域のテクストや作品に認められることも確認できた。ただし、理論的な整合性と同時に、二重化のパラドクス、同一性のトートロジーも両者の機能として見ることができる。しかし、前述したように、この一見不整合な絡み合いがある種のリアリティへと寄与していることも事実である。今後の課題としてこの関係性の、特殊性あるいは普遍性の詳細な分析が必要になるであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10 件)

鈴木純一、「メタファーとメディアの関係性」、メディア・コミュニケーション研究第 68 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読無、頁未定、2014(刊行予定)

吉田徹也、魔法山に響く菩提樹 - 時間小説のなかの音楽の運命 -、札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要第 44 号、査読無、頁未定、2014

大木文雄、創造的天才たちは文学作品の中

にどのように叙述されるか 村上春樹とトーマス・マンとゲーテの場合、北海道教育大学研究紀要『釧路論集』第 45 号(北海道教育大学) 査読無、115 - 125、2013

吉田徹也、メシアと救済 20 世紀ユダヤ思想史におけるローゼンツヴァイクの位置をめぐって、札幌大谷大学紀要第 43 号、査読無、11 - 16、2013

梅津真、ベンヤミンの亡命生活と「新しい天使」、プレーメン館第 12 号 査読無、151 - 154、2013

高橋吉文、Hypotheses fingo (仮説を虚構する) : ルーマンの不確定性三変化、メディア・コミュニケーション研究第 61 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、57 - 108、2011

鈴木純一、「メタファー」と「メタ思考」、メディア・コミュニケーション研究第 58 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、39 - 56、2010

山田貞三、Die Metapher und ihre Integrationsfunktion、メディア・コミュニケーション研究第 58 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、3 - 16、2010

高橋吉文、隠喩論 : ブルーメンベルク『世界の読解可能性』における絶対的隠喩、メディア・コミュニケーション研究第 58 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、57 - 122、2010

大木文雄、拒絶の精神としてのメタファー、メディア・コミュニケーション研究第 58 号(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院) 査読有、17 - 38、2010

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 純一 (SUZUKI JUNICHI)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：30216395

(2) 研究分担者

吉田 徹也 (YOSHIDA TETSUYA)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：80003531

高橋 吉文 (TAKAHASHI YOSHIFUMI)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：20091473

佐藤 拓夫 (SATOH TAKUO)
北海道大学・名誉教授
研究者番号：20091457

石川 克知 (ISHIKAWA KATSUTOMO)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：30142665

山田 貞三 (YAMADA TEIZOU)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50128237

西村 龍一 (NISHIMURA RYUICHI)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：10241390

堀田 真紀子 (HORITA MAKIKO)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：90261346

(3) 連携研究者

大木 文夫 (OHKI FUMIO)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70113660

梅津 真 (UMEZU SHIN)

北海道情報大学・経営情報学部・教授
研究者番号：70213494